

# 大学生の自己肯定感と性受容に関する研究

## —社会的性意識と父母像との関連—

### A Study of Sense of Self-Affirmation and Acceptance of Sex and Gender among Undergraduate Students : Relationship between Gender Consciousness and Image of Father/Mother

キーワード：自己肯定感、性受容、大学生、社会的性意識、父母像

久芳 美恵子 田島 真沙美\* 小林 正幸\*\*

\*世田谷区教育相談室

\*\*東京学芸大学教職大学院

#### 1. はじめに

思春期・青年期における自己肯定感の重要性はこれまで多くの研究によって示されてきている。松井・佐藤<sup>(19)</sup>や松井<sup>(18)</sup>は、中学生の進路の問題と絡めて、また伊藤<sup>(3)</sup>は、逸脱行為という視点から調査を行い、それぞれ自己肯定感を高めることは、適応促進につながるということを明らかにしている。廣實<sup>(2)</sup>は、大学生を対象とし、友人との相互理解が低く、親密な関係を回避する青年は、自己受容性が低いことを示唆している。また、久芳・竹村<sup>(17)</sup>および久芳・齊藤・小林<sup>(10)(11)(12)</sup>は、それぞれ小・中・高校生を対象として、自己肯定感と人とのかかわりの関連について検討し、人とのかかわりが良好である方が、自己肯定感が高いことを示している。

本研究では、自己肯定感を「自分自身のあり方を肯定する気持ちであり、自分のことを好きである気持ち」(高垣<sup>(23)</sup>)と捉えることとする。一定以上の自己評価が求められる点で自尊感情が「西欧的な自己肯定感」と指摘されるのに対し、自己肯定感とは、「日本的な自己肯定感」とされている。また、多次元性を想定する自己受容性や自尊感情と比較し、自己肯定感とは自己のあり方を包括的に肯定する感情と捉えられるため、本研究では、自己肯定感という概念を用いることとした。

椛島<sup>(8)</sup>は、社会学の立場から、現代社会の変容

に伴い女性の生き方が変化し、過剰なほど「自己実現」へ追いつめられており、そのことが自己肯定感・セルフエスティームに影響を及ぼしていると述べている。伊藤<sup>(5)</sup>は、女子における性受容は男子と比較し、思春期以降急激に低下することを明らかにしている。また、伊藤<sup>(7)</sup>は、女子青年を対象に、自尊感情および身体満足度と性同一性との関連を検討し、自尊感情には、自己の性の受容が関連していることを見出している。鈴木・伊藤<sup>(20)(21)</sup>は、小学生から大学生までの女子を対象に女性性受容と摂食障害傾向について検討し、中学生から大学生において、女性性受容の低さが自尊感情に作用して摂食障害傾向をもたらすという過程が考えられるとしている。尚、本研究においては「性受容」を鈴木・伊藤<sup>(20)</sup>を参考に「女性／男性であることの性的、身体的および社会的レベルでの受容」と捉えることとする。

また、伊藤<sup>(7)</sup>および青木<sup>(1)</sup>の研究から、自己肯定感や自尊感情に影響を及ぼす要因として、性役割や母親への同一視、両親の良好な関係の認知も重要な視点であると考えられる。

青年期における発達課題として、自我同一性の確立が挙げられるが、この自我同一性を考える上でも、性の領域は欠かせないものであるといえる(伊藤<sup>(7)</sup>など)。これまでの研究においては、青年期女子を対象としたものが多く、男子も調査対象とし、性別による

差異を検討したり、発達の観点を視野に入れて調査を行っている研究はあまり見受けられない(久芳・齊藤・小林<sup>(14)</sup>(<sup>15</sup>)(<sup>16</sup>)など)。

これまで述べてきた先行研究を踏まえ、本研究においてはFigure 1のような仮説を立てた。社会的性意識(「性役割」と類似の概念であるが、「役割」に限定せず、より広義の「性に対する意識」を扱うため、本研究においては「性意識」という言葉を用いる)および母親／父親像が、性受容に影響を及ぼし(①,②)、性受容が自己肯定感に影響を与える(③)。社会的性意識と父母像は自己肯定感に直接的にも影響を及ぼす(④,⑤)。社会的性意識と父母像は相互に影響を与えあっている(⑥)。

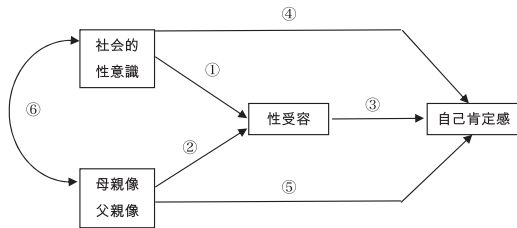


Figure 1 自己肯定感と性受容、社会的意識、父母像の関連(仮説モデル)

本研究では、大学生男女を対象とし、自己肯定感、性受容、社会的性意識、母親／父親像を調査し、これらの関連について、上述の仮説モデルを検証することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象

東京都および埼玉県の私立大学5校に通う大学生男子、女子、計1015名(男子:501名、女子:514名)。

### 2. 手続き

以下の4種類から構成される質問紙調査を実施した。調査用紙は無記名で、性別の記入を求めた。調査は、2007年5月～10月に実施した。

#### (1) 自己肯定感尺度

自分自身をどの程度肯定的に捉えているかを測定

するために、自己に関する評価を求める尺度で、8項目、4件法、1因子から成る(久芳ら<sup>(10)</sup>(<sup>11</sup>)(<sup>12</sup>)など)。

#### (2) 性受容尺度

鈴木・伊藤<sup>(20)</sup>、伊藤<sup>(7)</sup>の研究を参考に久芳ら<sup>(13)</sup>が作成した被調査者が自分の性を性的、身体的および社会的レベルで受容している程度について回答を求める尺度。女子用12項目、男子用10項目、4件法。

#### (3) 社会的性意識尺度

鈴木・伊藤<sup>(20)</sup>、伊藤<sup>(7)</sup>の研究を参考に久芳ら<sup>(13)</sup>が作成した被調査者の捉えている男女に振り分けられた性への意識について回答を求める尺度。本研究においては、自己の性受容により深く関連していると考えられる同性の性意識について回答を求めた。女子用8項目、男子用10項目、4件法。

#### (4) 母親像尺度、父親像尺度

青木<sup>(1)</sup>、柏木・高橋<sup>(9)</sup>および伊藤<sup>(7)</sup>を参考に久芳ら<sup>(13)</sup>が作成した被調査者の親に対する認識について回答を求める尺度。本研究においては、自己の性受容により深く関連していると考えられる同性の親に対する認識について回答を求めた。女子用、男子用ともに8項目、4件法。

## III. 結果と考察

### 1. 尺度の検討

実施した質問紙を構成する4種類の尺度について因子分析を行った。その際、分析の手法については久芳ら<sup>(13)</sup>の研究における各尺度の分析を参考にした。

#### (1) 自己肯定感尺度

女子、男子ともに8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、主成分分析を行った結果、女子は負荷量の低い1項目を削除し、7項目( $\alpha=.768$ )、男子は8項目( $\alpha=.801$ )、いずれも1因子が抽出された。

## (2) 性受容尺度 (Table 1-1、Table 1-2)

女子の12項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、プロマックス回転による主成分分析を行った。負荷量の低い2項目を削除し、再度分析を行った結果、10項目、3因子が抽出された。第1因子は「母性的性受容」(4項目)、第2因子は、「中核的性受容・身体的満足」(以下、「中核的・満足」、4項目)、第4因子は「身体的劣等感」(2項

目)と命名した。

男子の10項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、プロマックス回転による主成分分析を行った。負荷量の低い3項目を削除し、再度分析を行った結果、7項目、3因子が抽出された。第1因子は「身体的満足」(3項目)、第2因子は「中核的性受容」(2項目)、第3因子は「身体的劣等感」(2項目)と命名した。

Table 1-1 大学生女子「性受容尺度」の因子分析結果

質問項目	母性	中核・満足	劣等感	共通性
	$\alpha = .725$	$\alpha = .696$	$\alpha = .449$	
11. 育児は母親の喜びである	.850	-.146	-.213	.662
3. 子供を生めるのは女性の喜びだ	.825	-.010	-.068	.659
6. 将来、ぜひ子どもを産みたい	.765	.016	.172	.671
9. 女性であれば、月経があるのは当然だ	.517	.069	.011	.289
2. 自分の身体が好きである	.040	.851	-.071	.754
5. 自分の身体に満足している	-.054	.814	-.085	.666
10. 自分の身体は異性からみて魅力的だと思う	-.094	.651	-.052	.417
1. 女に生まれてよかった	.305	.506	.281	.506
12. 異性から身体のこと嫌なことを言われたことがある	-.116	.054	.817	.638
8. 自分の身体にコンプレックスがある	.040	-.243	.722	.614
因子間相関	母性	.211	.194	
	中核・満足	.211	-.073	
	劣等感	.194	-.073	
固有値	2.479	2.282	1.452	
削除項目				
4. 生まれ変わっても、また女に生まれたい				
7. 将来あの人のようになりたいと思う同性の大人が身近にいる				(主成分分析、プロマックス法)

Table 1-2 大学生男子「性受容尺度」の因子分析結果

質問項目	満足	中核的	劣等感	共通性
	$\alpha = .754$	$\alpha = .732$	$\alpha = .472$	
8. 自分の身体は異性からみて魅力的だと思う	.834	-.078	.087	.643
2. 自分の身体が好きである	.828	.076	-.028	.736
4. 自分の身体に満足している	.736	.126	-.036	.620
3. 生まれ変わっても、また男に生まれたい	-.021	.899	.009	.799
1. 男に生まれてよかった	.112	.844	-.011	.778
10. 異性から身体のこと嫌なことを言われたことがある	.206	-.130	.893	.774
6. 自分の身体にコンプレックスがある	-.289	.194	.671	.612
因子間相関	満足	.269	-.216	
	中核的	.269	-.048	
	劣等感	-.216	-.048	
固有値	2.276	1.801	1.353	
削除項目				
5. 将来あの人のようになりたいと思う同性の大人が身近にいる				
7. 男性であれば、射精があるのは当然だ				
9. 男性の筋肉質な身体はたくましさを感じる				(主成分分析、プロマックス法)

## (3) 社会的性意識尺度 (Table 2-1、Table 2-2)

女子の8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、バリマックス回転による主成分分析を行った。負荷量の低い1項目を削除し、再度分析を行った結果、7項目、2因子が抽出された。第1因子は「楽観的主婦志向」(4項目)、第2因子は「社会進出」(3項目)と命名した。

男子の10項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、バリマックス回転による主成分分析を行った。負荷量の低い1項目を削除し、再度分析を行った結果、9項目、2因子が抽出された。第1因子は「ステレオタイプの性意識」(7項目)、第2因子は「家庭的性意識」(2項目)と命名した。

子は「家庭的性意識」(2項目)と命名した。

## (4) 母親像尺度・父親像尺度 (Table 3-1、Table 3-2)

女子の8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、プロマックス回転による主成分分析を行った結果、8項目、2因子が抽出された。第1因子は「母親への同一視」(5項目)、第2因子は「妻としての母親像」(3項目)と命名した。

男子の8項目からなる質問紙に対する被調査者の反応について、主成分分析を行った。負荷量の低い1項目を削除し、再度分析を行った結果、7項目、1因子が抽出された。これをポジティブな父親像とし

Table 2-1 大学生女子「社会的意識尺度」の因子分析結果

質問項目	楽観的	社会進出	共通性
	$\alpha = .610$	$\alpha = .577$	
8. 女性は働かなくても夫の収入があれば生活できるので得／楽である	.775	-.028	.601
5. 女性は甘えが許されるので得である	.752	.083	.573
2. 女性は期待されないのが楽である	.720	-.149	.541
3. 家事や育児は女性の仕事である	.433	-.199	.227
4. 女性も専門的なことを学んで、社会に生かすべきである	-.110	.811	.670
7. 女性も社会的に責任ある立場に立つべきである	-.127	.738	.561
1. 結婚しても子どもができて、仕事を続けるべきである	.000	.635	.403
固有値	1.900	1.676	
寄与率 (%)	27.149	23.944	
累積寄与率 (%)	27.149	51.093	
削除項目			
6. 女性は周囲への気配りが期待される			(主成分分析、バリマックス法)

Table 2-2 大学生男子「社会的意識尺度」の因子分析結果

質問項目	ステレオタイプ	家庭的	共通性
	$\alpha = .755$	$\alpha = .630$	
6. 男性は責任ある仕事を任せてもらえる	.751	.060	.567
3. 男性はやりたいことができる	.668	-.075	.451
4. 家を継ぐのは男である	.665	.070	.447
1. 男性は女性より高い地位を得られる	.656	-.141	.450
2. 親の面倒をみるのは、男の役割だ	.575	.088	.338
8. 男であるというだけで無条件に受け入れられる	.561	-.111	.327
10. 男は得なことが多い	.561	-.064	.319
5. 男性も子育てに積極的に参加すべきである	.090	.856	.721
9. 男性も家事を分担すべきである	-.155	.835	.721
固有値	2.875	1.488	
寄与率 (%)	31.945	16.536	
累積寄与率 (%)	31.945	48.481	
削除項目			
7. 自分の妻や子を養うのは男として当然だ			(主成分分析、バリマックス法)

Table 3-1 大学生女子「母親像尺度」の因子分析結果

質問項目	同一視	妻	共通性
	$\alpha = .764$	$\alpha = .809$	
6. 母が好きである	.872	-.075	.714
7. 母は、自分の味方である	.822	-.055	.644
4. 母のようにはなりたくない	-.754	-.044	.596
2. 母のような生き方をしたい	.666	.106	.511
1. 親から否定的なことを言われる （「女のくせに…」など）	-.493	-.023	.253
5. 母は、父と結婚して幸せである	-.054	.927	.823
8. 将来父のような人と結婚したい	-.047	.837	.673
3. 母は父を大切にしている	.141	.773	.702
因子間相関	妻	.392	
固有値		3.071	2.616

(主成分分析、プロマックス法)

Table 3-2 大学生男子「父親像尺度」の因子分析結果

質問項目	因子	共通性
	$\alpha = .839$	
6. 父が好きである	.835	.698
2. 父のような生き方をしたい	.766	.587
3. 父は母を大切にしている	.765	.586
7. 父は、自分の味方である	.753	.567
4. 父のようにはなりたくない	-.734	.539
5. 父は、母と結婚して幸せである	.684	.468
8. 将来母のような人と結婚したい	.447	.200
固有値	3.644	
寄与率 (%)	52.058	

1. 親から否定的なことを言われる  
（「男のくせに…」など） (主成分分析)

て捉えることとする。

男女ともに、調査項目の差異はあるものの、中学生・高校生を対象とした久芳ら<sup>(15)</sup><sup>(16)</sup>の尺度の構造と同一の因子構造が得られた。

女子の性受容尺度は、小学生においては、「中核的・母性的性受容」と「身体的満足」の2因子構造であったが(久芳ら<sup>(14)</sup>)、中・高生を対象とした研究では、調査項目の違いはあるものの、本結果と同様の3因子構造が確認された(久芳ら<sup>(15)</sup><sup>(16)</sup>)。小学生の時点では未分化であった性受容が中学生段階で身体的・性的成熟に伴い、「母性的性受容」が分化し、単独で因子を構成していると考えられる(久芳ら<sup>(16)</sup>)。そして、その構造は大学生まで変化することはなく、同じ構造で推移しているといえる。また、小学生から中学生に移行する段階で、「身体的劣等感」が「身体的満足」とは異なる因子として抽出されている。このことには、この時期の女子が第二次性徴に伴う身体的発達の認知に戸惑い、混乱している状況にあり、身体面において自己像をゆがめて捉えていること(鈴木・伊藤<sup>(20)</sup>)が影響を及ぼしていると考えられる。このような捉え方は、大学生段階まで続いていることが本結果により明らかになった。伊藤<sup>(4)</sup>は、高校生を対象に調査を行い、女子は男子に比べて身体や性格に対するコンプレックスが強く、「他者から見た自己」を低く評価することを指摘している。女子にとってのこの混乱は、誰もが経験し得るものであり、この時期以降、身体的な「満足」と「劣等感」は単なる

逆転の概念とは異なる次元のものとして捉えられる可能性が示唆されたといえよう。

男子の性受容尺度は、小学生において「中核的・身体的満足」と「身体的劣等感」の2因子構造であったが(久芳ら<sup>(14)</sup>)、中・高生では、「中核的・身体的満足」が「身体的満足」と「中核的性受容」に分化し、3因子構造となっている(久芳ら<sup>(15)</sup><sup>(16)</sup>)。本結果より、その後大学生まで変化はなく、同じ構造であることが明らかになった。女子では、中学生以降「身体的満足」と「身体的劣等感」が分化しているが、男子の場合には小学生段階から「身体的満足」とは異なる因子として「身体的劣等感」が抽出され、それが大学生まで続いている。このことから、男子の場合には、第二次性徴による身体的変化の影響を女子ほど受けていない可能性が考えられる。浦上・小島・沢宮・坂野<sup>(24)</sup>は、男子青年の瘦身願望について研究し、瘦身願望を抱える男性が増えてきたとはいえ、「筋肉質なたくましい肉体」を望んでいる男性は依然として多いことを指摘している。このように男子の場合は、第二次性徴に伴う男性らしい身体の変化をポジティブに捉える側面もあるとも考えられる。山下<sup>(25)</sup>は、一般大学生から摂食障害患者特有の心理的特徴を見出し、その特徴が女子は体つきや性的能力などに関する自己内部の葛藤であるのと比べ、男子は人間関係に関する社会的葛藤であると述べている。以上のことから、「身体的劣等感」のあり方は女子とは異なる可能性も推測される。

男子は中・高生において、身体的特徴とは異なる次元で、「中核的性受容」が抽出されているが、女子においては、中・高生において「身体的満足」と「中核的性受容」が同一因子として抽出されている(久芳ら<sup>(15)</sup> <sup>(16)</sup>)。そして、この傾向は大学生においても引き続き確認された。男子は、身体的特徴とは異なった次元で中核的性受容が確立される一方で、第二次的徴以降、女子は両者を切り離して捉えることは難しくなると推察される。青木<sup>(1)</sup>は、中学生女子の性同一性の葛藤内容とその背景を検討し、女性性非受容群では、身体的変化に対する戸惑いが強く、身体像に関する自己評価が低いことを明らかにしている。また、伊藤<sup>(7)</sup>は、青年期女子の身体満足度と性同一性との関係においても、自己の性の受容が身体の受容につながるとしている。このように、特に女子においては、身体的に満足できていることと中核的な性の受容に密接な関連性があることが本結果に影響を及ぼしたと考えられる。

### 3. 自己肯定感と性受容、社会的性意識、母親／父親像の関連

各尺度の因子得点を算出し、自己肯定感と性受容、社会的性意識、母親／父親像の関連を検討するため、仮説モデルに基づきパス図を作成し、パス解析を行った。結果はFigure 2-1、Figure 2-2に示した通りである。

#### (1) 女子について

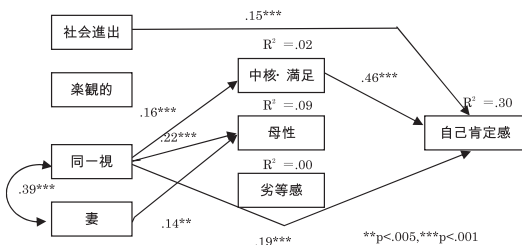


Figure 2-1 自己肯定感、性受容と影響要因の関連

#### ①パス解析の結果 (Figure 2-1)

女子の性受容尺度の「中核的・満足」は自己肯定感に影響を及ぼしていることが確認されたが、「母性

的性受容」「身体的劣等感」の影響は認められなかった。社会的性意識尺度の「社会進出」は性受容の各因子を介さず、自己肯定感に直接的に影響を及ぼしているという結果となった。「楽観的主婦志向」には、いずれの関連性も見出されなかった。母親像尺度の「母親への同一視」は「中核的・満足」と「母性的性受容」に影響を及ぼしているとともに、自己肯定感に直接的にも影響を及ぼしていることが確認された。「妻としての母親像」は「母性的性受容」へ影響を及ぼしていることが認められた。また、母親像尺度の「母親への同一視」と「妻としての母親像」に有意な相関が見出された。

#### ②性受容との関連

先行研究同様、大学生においても、「中核的・満足」が自己肯定感の獲得に影響を及ぼすという結果が得られた。しかし、性受容の自己肯定感への影響は高校生までと比べて限定されており、「母性的性受容」や「身体的劣等感」には自己肯定感への影響が認められず、これは大学生に特有の結果であるといえる。中・高生の結果においても「中核的・満足」の影響は最も大きく(久芳ら<sup>(15)</sup> <sup>(16)</sup>)、これについては、大学生を対象とした本結果にも合致する。鈴木・伊藤<sup>(20)</sup>は、「身体的満足」と「自尊感情」との間には高い相関があることを指摘している。また、中学生以上においては、「積極的性受容」が「自尊感情」に影響を与えるということも示している。

鈴木・伊藤<sup>(21)</sup>は、中学生では「母性」が「自尊感情」に影響を及ぼしているが、高校生・大学生では、その影響が見出されず、必ずしも自尊感情を高めるものではないとされている。大学生を対象とした本研究は、これを支持する結果となった。また、大学生になると異性との優劣や損得の比較ではなく、自己の中に女性性の価値を見出している可能性が指摘されており(鈴木・伊藤<sup>(21)</sup>)、このことが本結果においても「身体的劣等感」の影響がみられなかったことの一因であるといえる。鈴木・伊藤<sup>(20)</sup>は、小学校5,6年生から中学2,3年生にかけて女子の自尊感情は著しく低下し、高校生段階までほぼそのまま、大学になると回復すると述べている。自己肯定感においても、自

尊感情と同様に大学生で回復し、高校生までとは異なる様相をみせると想定することもできる。それに伴って規定要因にも変化がみられるとも考えられるのではないだろうか。

### ③社会的性意識との関連

高校生までを対象とした調査によれば(久芳ら<sup>(14)</sup>(15)(16))、「楽観的主婦志向」「社会進出」のどちらの社会的性意識も、性受容の各因子を介して、または直接的に自己肯定感を高める方向に作用しており、特に中・高生に関しては、相反する正負双方の影響が認められていた。しかし大学生を対象とした本結果においては、「楽観的主婦志向」では関連性が認められず、「社会進出」においては、性受容の各因子を介することなく、直接的に自己肯定感に影響を及ぼしているという結果となった。

伊藤<sup>(6)</sup>は性同一性の発達過程を記述するなかで、青年期における性同一性の形成には2つの相があるとしており、第1の相は青年前期で、性同一性の身体的側面における危機が訪れるとし、第2の相は中・後期で、認識力の高まりや社会経験の増大に伴って性役割の理解が進み、異性関係が生じてくると、性同一性の社会的側面における危機が訪れるとしている。鈴木・高橋<sup>(22)</sup>は、“仕事か家庭か”という二者択一の生き方ではなく、“仕事も家庭も”両立させようとする、自立的な女性像を象徴している群では、社会的立場としての女性性を受け入れられないことから生まれてくる葛藤が自己に与える影響は大きいと指摘している。これらの点から、大学生という年齢段階は、社会的側面における性意識に葛藤を生じやすい時期であると考えられる。本研究の対象は「大学生」に限定されていることから、卒業後は社会で働く進路を考えている人が大半を占める環境であるといえる。そのため、「社会進出」の性意識の強さが自己肯定感を高めることにつながったと考えられ、同年代の違う立場の女子を対象とした場合には、異なる結果が得られることが推測される。

さらに、社会的意識と性受容の関連性が見出されなかったことは大学生特有の結果であり、この点については、さらに検討を重ねる必要があると思われる。

### ④母親像との関連

伊藤<sup>(7)</sup>は、青年期女子の自尊感情には両親の良好な関係の認知と父親への信頼が関係し、母親へ同一視できないことが性の非受容につながっているとしている。高校生以下の結果同様(久芳ら<sup>(14)</sup>(15)(16))、これと合致する結果が得られている。特筆すべきは、他校種と比較して、「妻としての母親像」が「母性的性受容」に限定して影響を及ぼしている一方で、「母親への同一視」は「中核的・満足」「母性的性受容」への影響だけでなく、自己肯定感への直接的な影響が確認されていることである。大学生段階では、母親を同性のモデルとして同一視できることが重要な要因となっていると推察される。ただし、両因子には相関が認められていることから、伊藤<sup>(7)</sup>の述べているように、母親のあり方の背景には夫との関係性があることを十分に考慮する必要があり、良好な両親の関係を認知できることは依然として重要な要因であるといえよう。

### (2) 男子について (Figure 2-2)

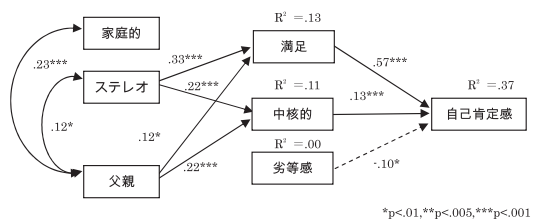


Figure 2-2 自己肯定感、性受容と影響要因の関連

### ①パス解析の結果

男子の性受容尺度の「身体的満足」および「中核的性受容」は自己肯定感に影響を及ぼし、「身体的劣等感」は自己肯定感に負の影響を及ぼしていることが確認された。社会的性意識の「ステレオタイプの性意識」は「身体的満足」、「中核的性受容」へ影響を及ぼしているという結果となった。「家庭的性意識」にはいずれの関連性も見出されなかった。父親像は「身体的満足」、「中核的性受容」に影響を及ぼしていることが認められた。また、父親像は、社会的性意識の「ステレオタイプの性意識」と「家庭的性意識」それぞれと有意な相関があった。

## ②性受容との関連

性受容の各因子が自己肯定感に影響を与えており、性を受容できていることが自己肯定感の獲得を促進するという結果となった。女子ではその関連性が高校生以下と比べて見出されなかった一方で、男子においては、小学生から高校生にかけて発達に伴って性受容が自己肯定感に与える影響が減少する傾向がみられていたが(久芳ら<sup>(14)</sup> <sup>(15)</sup> <sup>(16)</sup>)、大学生段階においては再び影響力が強まるという女子とは明らかに異なる特徴が確認された。「身体的満足」の影響が大きいことは、高校生以下の男子の結果および女子の結果とも一致するものの、「中核的性受容」と「身体的劣等感」の影響は、中・高生にはみられなかったものである。これまでに男子の性受容についての研究はほとんど行われてきていないことから、本結果のみで男子のこの特徴を説明することは難しいが、性受容の獲得に関して、女子とは異なる過程が想定されることから、今後、発達の観点からも検討を続けることが求められる。

## ③社会的性意識との関連

「ステレオタイプの性意識」は「身体的満足」、「中核的性受容」を高める方向に作用しており、これは高校生以下の結果とも合致する(久芳ら<sup>(14)</sup> <sup>(15)</sup> <sup>(16)</sup>)。一方で、高校生以下で確認された「身体的劣等感」への影響はみられなかった。加えて大学生においては、これまでに確認されていた「家庭的性意識」の影響が認められなかった。先述のように青年期中・後期は、社会的側面の危機で、性役割葛藤が急増すると考えられる(伊藤<sup>(6)</sup>)。本研究は、大学生を対象としていることから、卒業後の進路を意識し、“社会に出て働き、家族を養う”というステレオタイプの性意識の高さが性受容の獲得に影響を及ぼしている可能性が考えられる。そのため、相対的に「家庭的性意識」の影響は影を潜めているといえるのではないだろうか。

さらに高校生以下では確認されていた「ステレオタイプの性意識」の「身体的劣等感」への影響が、大学生では認められないことにも、身体的側面の危機から社会的側面の危機へ移行したことが何らかの影響

を及ぼしていると推察できるのではないだろうか。

## ④父親像との関連

「父親像」は、「身体的満足」と「中核的性受容」に影響を及ぼし、間接的に自己肯定感を高めている。これは高校生以下と同様の結果である。伊藤<sup>(6)</sup>は、女子が母親に対する評価と性受容との関連で葛藤を抱きやすいのと比較し、男子は葛藤が少ないとしている。大学生においては、中・高生でみられた自己肯定感への直接的な影響は認められなかったものの、母親との夫婦関係も含めた父親へのポジティブな評価は、女子だけでなく大学生男子にとっても、重要な要因であると考えられる。

## IV. まとめ

本研究は、大学生男女を対象に、自己肯定感と性受容との関連および社会的性意識、母親／父親像それぞれの関連を明らかにした。

女子においては、「中核的・満足」のみが自己肯定感に影響を及ぼし、男子においては、すべての性受容因子が自己肯定感に影響しているという結果となった。

女子においては、社会的性意識が性受容を介して間接的に自己肯定感へ影響を与えるという結果は見出されず、「社会進出」が直接的に自己肯定感に影響を及ぼすという結果となった。母親像では「母親への同一視」が性受容の「中核的・満足」を介して、また直接的にも自己肯定感に影響を及ぼしていることが確認された。

男子においては、社会的性意識の「ステレオタイプの性意識」とポジティブな父親像がそれぞれ、性受容の「身体的満足」および「中核的性受容」を介して自己肯定感に影響を及ぼしていることが確認された。

本研究では女子においては、高校生までの結果と比較し、性受容をはじめ、その他の要因が自己肯定感に与える影響はより限定されているという結果となった。女子の場合は中学生で最も複雑な構造になり(久芳ら<sup>(16)</sup>)、その後関連性は見出されにくくなっていく



と推測される。一方、男子は高校生では確認されなかった性受容と自己肯定感との関連が確認された。しかし、社会的性意識や父親像との関連は高校生以下と比較し、あまり見出されず、女子とは異なる発達のな変化がみられると考えられる。

## V. 今後の課題

本研究においては、これまで性受容に関する研究では対象として扱われてこなかった男子も対象として調査を行った。各尺度について、今後、信頼性および妥当性を高める必要がある。また、伊藤<sup>(5)</sup>、鈴木・伊藤<sup>(20)</sup>は、性受容に影響を与える要因として「異性意識」「異性の性役割意識」「異性の親への意識」なども指摘しており、これらの要因を含めた検討および男子特有の要因などの検討を十分に積み重ねることが求められる。

これまでに小・中・高校生の自己肯定感と性受容の関連が検討されてきているが(久芳<sup>(14)</sup>、<sup>(15)</sup>、<sup>(16)</sup>)、今後は発達の観点から縦断的に、さらに詳細な検討を行い、各発達段階における特徴を明らかにしていくことが望まれる。

## 〈引用文献〉

- (1) 青木紀久代(1991) 女子中学生における性同一性の形成 心理学研究, 62, 102-105.
- (2) 廣實優子(2003) 現代青年の交友関係から見た自己受容性と社会的スキル 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 52, 305-310.
- (3) 伊藤忠弘(2000) 青年期の自尊感情と逸脱行動の関係 日本教育心理学会第42回総会論文集, 636.
- (4) 伊藤裕子(1998) 高校生のジェンダーをめぐる意識 教育心理学研究, 46, 247-254.
- (5) 伊藤裕子(2000a) 青年期のジェンダー(特集:ジェンダーと現代社会) 教育と学, 48, 229-235.
- (6) 伊藤裕子(2000b) 思春期・青年期のジェンダー 伊藤裕子(編)ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房, 30-51.
- (7) 伊藤裕子(2001) 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情, 身体的満足との関連から— 教育心理学研究, 49, 458-468.
- (8) 梶島彩子(2005) 子どもをめぐる自己肯定感・セルフエスティームについて 日本女子大学人間社会研究科紀要, 11, 71-85.
- (9) 柏木恵子・高橋恵子(1995) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房
- (10) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2005) 中学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について 東京女子体育大学紀要, 40, 19-28.
- (11) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2006) 小学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について 東京女子体育大学紀要, 41, 13-24.
- (12) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2007a) 小、中、高校生の自己肯定感に関する研究 東京女子体育大学紀要, 42, 51-60.
- (13) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2007b) 自己肯定感と性受容の関連について(1) —尺度作成の試み— 日本教育心理学会第49回大会総会論文集, 502.
- (14) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2009) 小学生の自己肯定感と性受容に関する研究—社会的性意識と父母像との関連— 東京女子体育大学紀要, 44, 55-66.
- (15) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2010) 高校生の自己肯定感と性受容に関する研究—社会的性意識と父母像との関連— 東京女子体育大学紀要, 45, 143-154.
- (16) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸(2011) 中学生の自己肯定感と性受容に関する研究—社会的性意識と父母像との関連— 東京女子体育大学紀要, 46, 47-60.
- (17) 久芳美恵子・竹村美砂(2004) 自己肯定感と人とのかかわり 東京女子体育大学紀要, 39, 15-23.
- (18) 松井賢二(2001) 中学生の学校適応と進路

(キャリア)の成熟, 自己肯定感との関係(Ⅱ)

新潟大学教育人間科学部紀要(人間・社会科学編), 4, 237-247.

- (19) 松井賢二・佐藤優子(2000) 中学生の学校適応と進路(キャリア)の成熟, 自己肯定感との関係 新潟大学教育人間科学部紀要(人間・社会科学編), 39, 157-166.
- (20) 鈴木幹子・伊藤裕子(2001) 女子青年における女性性受容と摂食障害傾向-自尊感情、身体満足度、異性意識を媒介として- 青年心理学研究, 13, 31-46.
- (21) 鈴木幹子・伊藤裕子(2002) 「女子青年における女性性受容と摂食障害傾向」へのコメントに対するリプライ 青年心理学研究, 14, 99-106.
- (22) 鈴木慶子・高橋靖恵(2005) 青年期女子の女性性受容—質問紙法とロールシャッハ法による検討— 九州大学心理学研究, 6, 281-293.
- (23) 高垣忠一郎(2004) 生きることと自己肯定感 新日本出版社
- (24) 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二(2009) 男子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 57, 263-273.
- (25) 山下あかり(2004) 自己受容との関連からみた EDI-2による大学生の摂食障害傾向 臨床発達心理学研究, 3, 22-32.